

日本独文学会

2021 年秋季研究発表会

## 研究発表要旨

リアルタイム質疑応答

2021 年 10 月 2 日（土）・10 月 3 日（日）

第 1 日 12 時 50 分より

第 2 日 10 時 00 分より

Zoom オンライン開催

参加費：会員：無料

非会員：1,000 円（要事前申し込み）

日本独文学会

〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603

Tel/Fax: 03-5950-1147 E-Mail（メールフォーム）：<https://www.jgg.jp/mailform/buero>

秋季研究発表会連絡用メールアドレス：[tagung2021tohoku\\_at\\_jgg.jp](mailto:tagung2021tohoku_at_jgg.jp)（\_at\_=>@）

## 目次

### 第1日 10月2日(土)

ポスター発表 (13:00~14:30) C会場 (Zoom チャンネル3) ..... 4  
ブレイクアウトルーム1:

LINE OpenChat als Kommunikationskanal zwischen Lehrenden und Lernenden im  
DaFUnterricht an japanischen Universitäten – Chancen und Herausforderungen.

Nina Kanematsu (共同発表者: Christian Steger)

ブレイクアウトルーム2:

20世紀前半のブラームス評価における北ドイツの文学 石井萌加

シンポジウム I (14:30~17:30) A会場 (Zoom チャンネル1) ..... 6  
グリム・メディア・対話——変容し活用されるドイツの民間伝承

**Deutsche Volkserzählungen der Brüder Grimm in Medien und für Dialoge  
– ihre Transformationen und Anwendungen**

司会: 金城ハウプトマン朱美

1. 日本における「ハーメルンの笛吹き男」 — 平成期を中心に 蚊野千尋
2. YouTube で受容される「赤ずきん」 野口芳子
3. Sandmännchen とグリム童話 金城ハウプトマン朱美
4. 口承文芸をオープンダイアログに活用する — ひとつの実験 横道誠

口頭発表: 語学 (14:30~16:25) B会場 (Zoom チャンネル2) ..... 10

司会: カンミンギョン・渡邊徳明

1. 動詞接頭辞 ge- と対格目的語 — ゲルマン祖語から古高ドイツ語にかけて  
の通時的考察 野添聡
2. 不定詞名詞化と項構造 — 「主語」に注目した不定詞名詞化研究の可能  
性 小林大志
3. er と「彼」, sie と「彼女」 — ドイツ語と日本語の「人称代名詞」につ  
いて 成田節

ブース発表Ⅰ（14:40～16:10） C会場（Zoomチャンネル3） ……………12  
ドイツ語の授業方法の選択 ―対面・オンデマンド・リアルタイム授業と学  
生にとっての『授業の質』 薦田奈美

ブース発表Ⅱ（16:15～17:45） C会場（Zoomチャンネル3） ……………13  
ドイツ語とオランダ語における並列と疑似並列の諸相  
岡部亜美（共同発表者：アークト沙羅、覚知頌春）

第2日 10月3日（日）

シンポジウムⅡ（10:00～13:00） A会場（Zoomチャンネル1） ……………14  
複合判断・単独判断とドイツ語文法 ―一定性を軸に

**Kategorisches/thetisches Urteil und die deutsche Grammatik**  
– mit besonderer Berücksichtigung der Definitheit

司会：藤縄康弘

1. es gibt の二面性 ―複合判断・単独判断の観点から 大喜祐太
2. 存在文と所在文における sein の構造と意味  
― sein は存在動詞かコピュラか？ 吉田光演
3. 複合判断の表出に見る度数詞 allein の意味機能の再考 筒井友弥
4. Video, ergo sum  
― ACI（不定詞付き対格）構文における「主語」をめぐって 藤縄康弘

口頭発表：文学Ⅰ（10:00～11:15） B会場（Zoomチャンネル2） ……………18  
司会：里村和秋・加藤健司

1. スイスのヴィーラントとシェイクスピア 今村武
2. パウル・ツェランの翻訳「若きパルク」分析 齋藤由美子

口頭発表：文学Ⅱ／文化・社会（10:00～12:35）

C会場（Zoomチャンネル3）……………20

司会：鈴木伸一・松崎裕人

1. ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとイディッシュ語文学  
— 言語と文学における「ユダヤ性」へのアンビバレンツ 藤田恭子
2. フランツ・カフカにおける朗読とイディッシュ演劇 山口知廣
3. シネアストとしてのヨーゼフ・ロート  
— 『聖なる酔っぱらいの伝説』の映画シーンを手がかりに 依田哲朗
4. Stil – ein Brückenkonzept zwischen hermeneutischen und wissenssoziologischen Traditionen? Tobias Schickhaus

第1日 10月2日(土)

ポスター発表 (13:00~14:30) C会場 (Zoomチャンネル3)

ブレイクアウトルーム1

**LINE OpenChat als Kommunikationskanal zwischen Lehrenden und Lernenden im DaF-Unterricht an japanischen Universitäten – Chancen und Herausforderungen**

**Nina Kanematsu** (Sophia University), **Christian Steger** (Dokkyo University)

Der LINE OpenChat findet besonders seit der Umstellung auf Online-Unterricht vermehrt Anwendung im schulischen sowie universitären Bereich (vgl. dazu u. a. Fujii 2021; Okamoto, Guenther & Tateiwa 2020). Aufgrund der Abnahme von persönlichen sozialen Kontakten zwischen den Lernenden sowie einer größeren Distanz zwischen Lehrenden und Lernenden bestehen „wachsende digitale Kommunikationsbedarfe in Bildungseinrichtungen“ (Zorn 2021: 10). Ein der Lebenswelt der Lernenden nahe Kommunikationstool wie der LINE OpenChat kann eine entscheidende Rolle bei der Interaktion zwischen den Studierenden, dem Abbau von Hemmungen bei der Kontaktaufnahme untereinander sowie der Etablierung einer angstfreien und angenehmen Klassenatmosphäre übernehmen.

Nach Einsatz des LINE OpenChats in mehreren Kursen im Herbstsemester 2020 konnten wir bereits einige Beobachtungen zum Gebrauch und zur Akzeptanz des Chats anstellen. Unser Interesse galt dabei besonders den inhaltlichen Aspekten der Kommunikation im Chat, der Frequenz der Chatnutzung, der Kommunikationssprache sowie der Gruppeninteraktion.

Im Frühlingssemester 2021 setzten wir in 14 Kursen an drei Universitäten erneut den LINE OpenChat als Kommunikationstool ein und führten unter den Studierendeneine Umfrage zum Einsatz des Chats als unterstützendes Kommunikationstool im DaF-Unterricht durch. Die Ergebnisse dieser Umfrage werden in der Posterpräsentation vorgestellt und Chancen sowie etwaige Herausforderungen zur Diskussion gestellt.

## 20 世紀前半のブラームス評価における北ドイツの文学

石井萌加

作曲家ヨハネス・ブラームス（1833-1897）の 20 世紀前半の受容史において、彼の性格および作品の「北方」性を主張した言説が存在する。例えばヴァルター・ニーマンによるブラームス伝（1920 年初版）では、ハンブルク出身のブラームスは、生涯低地ドイツ的な性質を持ち続けたと評価される。こうした作曲家評価の中でしばしば言及されるのが、ブラームスと故郷を同じくする北ドイツ出身の作家・詩人らである。

本発表では、20 世紀前半ドイツ語圏でのブラームス評価における北ドイツの作家・詩人に関する言及に注目し、言説分析を行うことで、当時のブラームス像に、「北方」のいかなるイメージが反映されていたのか考察することを試みる。とりわけ注目したいのは、ブラームス受容史におけるフリードリヒ・ヘッベルの存在である。「北方」的なブラームス像におけるヘッベルの重要性を指摘するとともに、ヘッベルを通してこそ見えてくる、ブラームス作品を評価する際の語彙（悲劇性、厭世観、ペシミズム性など）を明らかにする。

生前から器楽作品（絶対音楽）の作曲家として受容されてきたブラームスは、対立関係にあったヴァーグナー派の作曲家らと比較して、文学や劇作に関連する議論からは遠い作曲家であった。ブラームス評価と北ドイツの作家・詩人との交差に迫る本発表は、ブラームス受容史を文学との関わりから論じるという点で、ブラームス受容研究に新たな視点を加えうる。

グリム・メディア・対話 ―変容し活用されるドイツの民間伝承

**Deutsche Volkserzählungen der Brüder Grimm in Medien und für Dialoge – ihre Transformationen und Anwendungen**

全体要旨

司会：金城ハウプトマン朱美

口承で語り継がれていたメルヒェンや伝説は、19 世紀初めにヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムが収集し、『子どもと家庭のメルヒェン集』ならびに『ドイツ伝説集』として出版された。以後、各国で民間伝承が収集され出版されるようになる。なかでもグリム兄弟のメルヒェンと伝説はドイツにおいては 19 世紀半ばから、日本においては 19 世紀末から書物や雑誌などの紙媒体で受容され続けている。多くの民間伝承に挿絵が添えられ、話の一部が語りなおされたり、パロディー化されたり、ミニ絵本化されたりしている。なかでもグリム童話は、これまで映画やテレビアニメ、風刺画などにも広く使用されている。

かつては口承で伝えられていたメルヒェンや伝説などの民間伝承が、グリム兄弟により書承化されたことを契機に、その細部が時代により、とくに記録メディアやコミュニケーション・メディアの普及により、変容している。グリム童話のなかには世界各地で受容されている話も存在する。そしてそれが今日でもなお出版され、配信され続けているのである。

5つの新旧メディア（①動画共有サービス YouTube、②インターネット、③テレビ、④絵本、⑤声・音声）における、ドイツの民間伝承のテキストと画像（図像）に注目し、現代のドイツおよび日本における民間伝承の意義、普遍性、オリジナリティなどについて学際的考察を試みることによって、問題点を明らかにすることが本シンポジウムの目的である。

社会情勢や媒介メディアに応じて文化が変容を繰り返しているように、民間伝承も変容し続けているのだろうか。変容しているのであれば、その実態をメディアごとに調査し、傾向を把握することによって、メディアと民間伝承の今後の展望について議論していきたい。

まず、ドイツだけでなく、日本でも有名な伝説「ハーメルンの笛吹き男」の受容を考察することにより、絵本という媒体を介した外国の伝説の日本における変容について考察する。続いて、グリム童話「赤ずきん」の YouTube

動画から、アクセス数の多い話を分析し、紙媒体のものと比較してその相違点を明らかにする。さらに旧東ドイツ時代に作成された子ども向けテレビ番組で当時も現在もドイツの子どもたちに人気がある長寿番組『みんなの砂じい』（*Unser Sandmännchen*）に注目する。主人公の砂じいも、そのほかの登場人物も声を発しない。グリム童話の登場人物が現れるエピソードを取り上げ、無声で展開されるグリム童話から、グリム童話の変容と普遍性について考察する。最後に、フィンランド発のオープンダイアログで応用されているドイツの民間伝承の再話と対話における、遠隔会議システムを用いた声の空間に注目する。上記のように本シンポジウムでは広く多角的にドイツの民間伝承とメディアとの関係について考察し、議論していきたい。

## 1. 日本における「ハーメルンの笛吹き男」—平成期を中心に

蚊野千尋

ドイツ伝説「ハーメルンの笛吹き男」の日本における受容研究は、発表者による2本の論文が存在するが、それらは明治期から昭和期までの受容に関する研究で、平成期についての研究ではない。調査の結果、平成期には邦訳が51話あることが判明した。この伝説はドイツの伝承文学として知られているが、邦訳の内容を検討すると、日本で主として普及しているのはグリム兄弟の「ハーメルンの子どもたち」ではなく、イギリスのロバート・ブラウニングの詩「ハーメルンの色とりどりの服を着た笛吹き男」であることが判明した。グリム兄弟版では笛吹き男は色とりどりの服を着ており、戻ってくるのは盲目の子と耳が聞こえない子の2人であり、子どもたちは山の中に消えて話が終わるが、ブラウニング版では笛吹き男は赤色と黄色の服を着ており、戻って来るのは足が悪い子1人であり、子どもたちは花が咲き乱れた楽園に行つて話が終わる。さらに平成期では、この伝説は子どもに毎晩読み聞かせるための物語集に収録されるようになり、1ページないし2ページの著しく簡潔な話に改変されるため、話の主題は明確に提示されていない。この内容では約束を守ることの大切さを子どもに教えることはできないのではないだろうか。本発表では明治期から昭和期までの邦訳の傾向を紹介してから、平成期の邦訳に焦点を当て、どのように受容されているのかについて、議論しながら考察していきたい。



## 2. YouTube で受容される「赤ずきん」

野口芳子

発表者は「赤ずきん」が明治期から平成期まで日本でどのように受容されているか調査するため約280冊の本を収集し、その結果を多くの論文に発表してきた。調査の結果、浮上した事実はいくまで提供者側からのもので、受容者側からのものではない。どのような本がよく読まれているかについては、実態を把握することができなかった。そこで YouTube に注目した。YouTube でアクセス数の多い「赤ずきん」を調べると、好んで受容される傾向が判明する。

1番アクセス数が多いのは、グリム版の英語版（日本語字幕付き）”Little Red Riding Hood”で、祖母は狼が来たとき外出中で喰われず、戻ってくると狼を箒で叩き出す。娘も祖母も喰われず猟師も出現しない話が最も人気がある。さらに絵本では1冊しかないフランス民話版が4番目に多いアクセス数を獲得している。「本当は怖い赤ずきん」と銘打ち、赤ずきんは祖母の肉を食べ、血を飲み、着物を脱いで狼のベッドに入るが、危険を察知して「おしっこ」と言って外に出て、狼を騙して家に逃げ帰る話である。グリム版でアクセス数が多いのはやはり英語版で、狼が川で溺死すると改変されているものである。紙媒体では腹の中の石が重くて死ぬという原文に忠実なものが多数を占める。

YouTube と紙媒体での受容の相違から何を読みとれることができるのか。共に議論しながら考察していきたい。

## 3. Sandmännchen とグリム童話

金城ハウプトマン朱美

Sandmännchen は、旧東ドイツで制作された子ども向けテレビ番組『みんなの砂じい』（Unser Sandmännchen）に登場するキャラクターである。主として就学前の子どもたちが、18時50分にテレビの前に座り、視聴している。番組の最後に、おなじみのテーマソングが流れ、「砂じい」が砂を撒くと、番組に登場している子どもたちはまるで魔法にかけられたように眠くなって床に入り、視聴者である子どもたちも眠くなるのだ。

番組内の数あるエピソードのなかで「メルヒェンの森」が舞台になっている話がある。砂じいは森の中で、赤ずきんや勇敢な仕立て屋といったグリム

童話の登場人物と出会う。しかしながら、砂じいは話さない。登場人物も声を発しない。いわゆる無声番組である。音声は、効果音とテーマソングだけである。本発表では、こうした無声番組におけるグリム童話の再話に注目し、グリム童話とは異なる展開になっている箇所から、視聴者は登場人物を見るだけでグリム童話だと理解できるのか検討する。人々が持つグリム童話のイメージが砂じいのエピソードでどのように表現されているのか考察する。砂じいをグリム童話の視点から考察した研究は存在しないので、本発表が嚆矢となる。60年以上続く超長寿番組でグリム童話が改変されながら生き続けている点から、グリム童話の普遍性についても考察し、この「砂じい」を文化的記憶としてとらえたい。

#### 4. 口承文芸をオープンダイアログに活用する—ひとつの実験

横道誠

精神療法（心理療法）の現場で、オープンダイアログが注目されている。オープンダイアログとは、1980年代前半以降、フィンランドのトルニオにあるケロプダス病院で発展した統合失調症の治療のための精神療法を指す。患者、その家族や知人、精神科医、心理士などが対等の立場でひたすら対話を続けるという療法だ。現在では世界的に注目され、各種の精神疾患、障害、その他の生きづらさを緩和するための療法として注目を高めている。思想的背景には、グレゴリー・ベイトソンの「ダブルバインド」、ミハイル・バフチンの「ポリフォニー」、ウンベルト・マトゥラーナとフランシスコ・バレーラの「オートポイエーシス」などがある。

発表者は、運営する自助グループでオープンダイアログにアレンジを加え、さまざまな生きづらさに苦しむ人々のための実施を試みている。発表者にとって、この「語り」の実践は、口承文芸研究（特にグリム兄弟の昔話に関するもの）を通じて親しんだ「語り」の世界と親和的なものだった。口承文芸から学んだ精神や技法を、オープンダイアログに活用する。具体的には、口承文芸の発想法に倣って、軽妙な語り口を導入し、突拍子もない展開を企み、幻想的な話題を混入させる。口承文芸の語り混ざったオープンダイアログは、従来のもものよりも豊かになる。この発表では、それらの実践例について報告する。

口頭発表：語学（14:30～16:25） B会場（Zoom チャンネル2）

司会：カンミンギョン・渡邊徳明

（14:30～15:05）

## 1. 動詞接頭辞 ge- と対格目的語

ーゲルマン祖語から古高ドイツ語にかけての通時的考察

野添聡

本発表は、古高ドイツ語における動詞接頭辞 ge- の機能面での衰退の過程を実証的に解明することを第一の目的としている。

古期ゲルマン語の動詞接頭辞 ge- は、完了相化の機能を持ち、現在完了形との競合の末に衰退したと考えられてきた。しかし、接頭辞 ge- の衰退の詳細な過程は今日まで十分に記述されてきたとは言い難い。

最近の先行研究では、接頭辞 ge- と対格・属格目的語の関係について様々に論じられている。しかし、上述の形式の相関関係については、研究者の間で意見が対立しており、より詳細な考究が俟たれている。

本発表では、ゴート語および古高ドイツ語の代表的な文献における ge- 動詞と Simplex（ge- の無い動詞）の直説法過去形のペアの全用例を収集した。さらに、全用例を対格・属格目的語との共起の有無、ならびに、対応する翻訳原典の動詞活用形ごとに分類した。上述の文献学的な調査の結果に基づいて、本発表では以下の3つのテーゼを主張する。

- ①：古期ゲルマン語において完了相化の機能を持っていた接頭辞 ge- は、古高ドイツ語の時代には完了相化の機能の衰退の途上にあつたと考えられるのではないか。
- ②：対格目的語は共起する動詞との組み合わせにおいて、動詞に完了的意味を付与したのではないか。
- ③：ge- 動詞と対格目的語の共起は、機能面で衰退した接頭辞 ge- の完了相化の機能を補填するものと考えられるのではないか。

(15:10~15:45)

## 2. 不定詞名詞化と項構造 — 「主語」に注目した不定詞名詞化研究の可能性

小林大志

ドイツ語における動詞の名詞化には、形態論的な手続きによる派生名詞化と、不定詞をそのまま中性名詞に転じる不定詞名詞化の2通りがある。本発表は、この2つの名詞化のうち、不定詞名詞化を取り扱う。動詞の名詞化はドイツ語学で盛んに論じられてきた主題の一つだが、中でも、基盤動詞に由来する項の振る舞いに関する問題については、特に激しい議論が交わされて来た。その成果として、現在、派生名詞化の項構造に関しては、基盤動詞の項構造が派生名詞化に直接的に継承されるのではなく、意味構造の継承を通じて間接的に継承される（したがって、派生名詞化の項構造は基盤動詞の項構造と同じではない）と考えられるようになっている。一方、不定詞名詞化の項構造に関しては、未だ有力な見解が示されるには至っていない。

本発表では、属格項の観察を通して、不定詞名詞化が基盤動詞の項構造と同じ階層的な項構造を持ち、常に最下位の項が属格項となると考えられることを指摘する。ところが、名詞句に生起する属格項は一つに限られるので、不定詞名詞化が基盤動詞と同じ階層的な項構造を持つとすると、属格項とならない上位の項の扱いが問題となる。本発表では、この問題に対し、不定詞名詞化に母文要素と束縛的關係をなす「主語」を想定することを提案する。この想定は、母文要素の分布に注目したコーパス調査を通じて、経験的に裏づけられる。

(15:50~16:25)

## 3. er と「彼」、sie と「彼女」 — ドイツ語と日本語の「人称代名詞」について

成田節

ドイツ語の授業などでは、人を表す3人称の人称代名詞（以下「3人称代名詞」と略記）er は「彼」、sie（単数）は「彼女」と自動的に対応させることが多い。しかし対照研究などでは、日本語の「彼・彼女」とドイツ語や英語の3人称代名詞の働きの違いが指摘されており、日本語には3人称代名詞は存在しないという主張さえある。先行研究には、テキストにおいて対象を指示する（referieren）方法として照応（アナファー）と直示（ダイクシス）を区別し、ドイツ語の3人称代名詞が照応的に働くのに対して、日本語の「彼・彼

女」は（広い意味で）直示的に働くという指摘もある。換言すれば、ドイツ語の *er* 等が文脈に既出の対象を受けて、それを叙述対象として維持する働きを持つのに対して、直示表現である日本語の「彼・彼女」は、文脈に既出の対象を指示する場合であっても、基本的には、その都度あらたに対象を指し直しているということになる。本発表では、照応（テキスト指示）と直示（現場指示）に加えて、話し手の記憶の中に存在する人物を指示する「記憶指示」も考慮に入れ、ドイツ語の3人称代名詞と日本語の「彼・彼女」の文法的なふるまいや、日本語/ドイツ語小説のドイツ語/日本語訳における（代名詞化の他に「言い換え表現」を含む）対象指示の方法の観察を通じて、テキスト構成におけるドイツ語の3人称代名詞と日本語の「彼・彼女」の違いを具体的に明らかにしたい。

ブース発表 I (14:40~16:10) C会場 (Zoom チャンネル 3)

### ドイツ語の授業方法の選択

一 対面・オンデマンド・リアルタイム授業と学生にとっての『授業の質』  
薦田奈美

本発表は、大学で行われている初修外国語としてのドイツ語の授業方法を対象とし、従来の対面授業と、コロナ禍により導入が加速したオンライン授業二形態（オンデマンド型・リアルタイム型）の学習効果の違いに焦点を当て、受講者にとって有益な、あるいは有益であると感じられるのはどのような授業実施方法であるのかを考える。

オンライン授業の学習効果については、オンライン学習の方が対面学習よりも効果があるという調査結果（コロンビア大学、2010年）がある一方、オンライン学習の方がテストの平均点はやや高いものの、満足度は低くなる、といった調査結果（ロシア国立研究所、2020年）もあり、特に昨年度以降「オンライン授業をいかに効率的に行うか」という観点での報告や論文は非常に多く見られたが、そもそもオンライン授業と対面授業のどのような点が異なり、その違いが学生にどのように作用しているかという点に着目した研究は未だ少ないと思われる。

本発表では、①大学で実施された学生アンケート及び発表者が独自に行ったアンケートの結果の分析、②授業内コミュニケーションに関する授業方法間の差、③各授業方法の違いに基づく学習効果と学生が感じる「授業の質」

の違い、という三点に基づき、授業内容に適した授業実施方法をいかに選択するか、セッションごとにフロアとの討論を行いながら検討する。

ブース発表Ⅱ（16:15～17:45） C会場（Zoomチャンネル3）

### ドイツ語とオランダ語における並列と疑似並列の諸相

岡部亜美, アーント沙羅, 覚知頌春

本発表では、ドイツ語・オランダ語の諸変種の観察を通して、両言語における並列及び疑似並列の特徴づけを提示するのに加え、並列構造からより従属的な疑似並列構造への連続体を地理的及び歴史的な観点から考察する。はじめに並列構造について通言語的な観点から、特にトランシルヴァニア・ザクセン方言を含むゲルマン諸語に着目し概観する。並列構造は、並列される語・句・節・文が同じ地位を持つ、被並列物の対称性を前提とする。しかしその意味は多様であり、単なる被並列物の列挙にとどまらず、事象の同時性、継起性などを示すことが可能である。類型論的にみると並列構造を表すためのストラテジーも様々である。以上を踏まえ、表面的には動詞句の並列構造に見えるが、意味的かつ／あるいは統語的には一つのまとまりがあるとみなされる構文を疑似並列構文という。疑似並列構文の性質は言語ごとに異なる。本発表ではまず、中世オランダ語の疑似並列構文を例に、動詞句の並列が枠構造を形成し、従属的な振舞いをみせることを例証する。一方、現代低地ドイツ語における疑似並列構文は、中世オランダ語の同構文と異なり並列構造の特徴をよく保っている。低地ドイツ語の疑似並列は、通常の間列構造で可能な意味関係に立脚していると考えられ、また、V2 目的語の取り出しを許さない。本発表では、ゲルマン諸語における疑似並列構文との比較を通し、疑似並列構文が従属構造化する際の要因を考察する。

## 第2日 10月3日(日)

シンポジウムⅡ(10:00~13:00) A会場(Zoomチャンネル1)

複合判断・単独判断とドイツ語文法 一定性を軸に

**Kategorisches/thetisches Urteil und die deutsche Grammatik**

**– mit besonderer Berücksichtigung der Definitheit**

全体要旨

司会：藤縄康弘

複合判断(kategorisches Urteil / Doppelurteil)と単独判断(thetisches Urteil / einfaches Urteil)は19世紀ドイツ語圏の言語哲学者 Franz Brentano と Anton Marty に遡る二種類の命題的判断の類型である。Marty (1918)によると、複合判断は主語による存在承認とそれに対する述定という異質の判断の複合であるのに対し、単独判断は存在承認(またはその否定としての存在棄却)のみから成る単一的な判断である：

(1) Diese Blume ist blau./Ich bin wohl./Mein Haus ist nicht belastet.

(2) Es regnet./Es gibt keine schwarzen Blumen./Ein Markt findet statt.

直示的に限定された主語を持つ(1)では、仮に全文が否定されても主語による存在承認は有効である。これに対し(2)における文法上の主語は、そもそも形式的な虚辞であるか、具体的内容を持っていても、その存在承認の効力が全文の否定とともに失われてしまう。(1)の複合判断が正真正銘の述定を意味する一方、(2)の単独判断は内容的には存在文に相当する。

言語学の分野で「複合判断」と「単独判断」が知られるようになったのは Kuroda (1972) 以降である。Kuroda (1972) は Marty (1918) を引きつつ、二つの判断の対立を日本語のハ文とガ文の機能的相違の説明に援用したが、まさにこれがきっかけとなり、この二つの用語は今日、言語学において文(ないし発言)の情報構造的差異を指すものと受け止められている。確かに、情報構造は文法研究の重要な課題だが、Marty (1918) は両判断の区別を明確に情報構造(「心理的主述関係」と別次元に位置づけていた。それだけに、用語本来の意図を正しく理解し、その発想がいかに今日の言語学に応用可能か、また、そこにどのような可能性が開け得るかを展望することが、言語研究者、とりわけドイツ語研究に携わる者に託された重要な課題であると言える。

本シンポジウムはこの課題に取り組む。全四本の発表のうち前半二本で

Marty の単独判断論の言語学的基礎をなす存在表現 (es gibt と sein) の分析を提示したのち、後半では Kuroda (1972) 以降注目されるようになった情報構造 (焦点関係)、および日本語ガ文に機能面で比肩し得るドイツ語の文法現象 (知覚動詞下の ACI 構文) を論ずる。その際、いずれの発表も名辞の定性を関心の軸に据える。というのも、主語が定であることが自明な複合判断に対し、単独判断に定の項が可能か、可能ならばどのような条件によるかは、いまだ十分に究明がなされていないからである。このように幅広い現象を扱いながらも的を絞った四本の発表を契機に、複合判断に単独判断を対置する発想の根底にある「主述関係を持たない文」という可能性を経験的・理論的に検証し、文法研究がいかにか(非)デカルト的になされるべきかをあらためて論ずる場としたい。

## 1. es gibt の二面性 — 複合判断・単独判断の観点から

大喜祐太

対格名詞句の指示性に注目してドイツ語非人称構文 es gibt を見てみると、以下のような二つの用法を対比させることができる。

- (1) Es gibt einige positive Beispiele. (提示的用法)
- (2) Die unglaubliche Geschichte, die hier erzählt wird, ist tatsächlich so passiert.  
Mark Whitacre, den Titelhelden, gibt es wirklich.  
(擬似的述語用法)

es gibt を含む存在表現は、ある事物を提示する目的に使用されることが多い。

(1) のような新情報の導入を示す「提示文」は単独判断に含まれると考えられる。それに対して、定名詞句を持ち、その名詞句に何らかの説明を付加する (2) や (3) のような用例は、主語・述語構造を備えた複合判断として理解できそうに思われる。

- (3) Die Abendhauptschule gibt es in Bremen, Hamburg und im Saarland.

とはいえ、es gibt 構文をコピュラ的な機能を持つ用法とみなし、sein 動詞を用いて言い換えることができるかどうかについては議論の余地がある。本発表では、es gibt 構文の二つの側面について、複合判断および単独判断の観点から考察し、es gibt の本質とも言える「存在承認・存在棄却」という性質について議論したい。



## 2. 存在文と所在文における sein の構造と意味 — sein は存在動詞かコピュラか？

吉田光演

Marty (1918)によれば, „Gott ist.“ のような存在文は主語・述語が未分化のまま事象の存在について承認する単独判断である。複合判断は存在承認の上に, 主語・述語構造が展開されて成立する。構造と意味の観点からは, コピュラ sein と存在動詞 sein の区別が問題になる。即ち, sein が現れる文は, 単独判断では存在動詞, 複合判断ではコピュラとして峻別できるか? 存在文にも存在動詞, コピュラの sein があるのか? この問題を生成文法と形式意味論の立場から考察することが本発表の目的である。次のような文が対象になる。

- (1) a. Gott ist.                      b. Es sind Pferde.  
c. Da ist eine Katze.              d. Hinter dem Haus ist ein Wald.

(1a)の sein は稀だが, existieren で言い換えた文は容認される。(1a) は述部のない隠れたコピュラ文と見ることも可能だが, 本発表では(1a)の sein を存在動詞と分析し, ドイツ語の主文は, 基底の SOV 語順から, 前域を埋める話題化移動(または虚辞挿入)と V2 位置への定動詞移動によって派生すると考える。故に(1a)は中域が空の有標 V2 文となる。sein は時制・人称を担うが, 語彙範疇としての意味が希薄であるため, 有標性を救う語用論的条件(唯一存在の前提)が必要である。この分析では, 前域の虚辞 es による存在文(1b)や da による存在文(1c)では, V2 が充足し, sein の存在意味が顕現し, 存在の対象である主語が背景化して単独判断が成立する。一方, 場所・対象が現れる所在文(1d)では, 場所が前置される場合が無標である。本発表では, 所在文も存在動詞の具現であり, 複合判断ではないと主張する。

## 3. 複合判断の表出に見る度数詞 allein の意味機能の再考

筒井友弥

ドイツ語で排他的な度数詞とみなされる nur と allein は, 焦点とする語以外の要素(代替値)を排除する。この際, 両者は限量的な機能をもつとされる。一方で, 両者には, スケールの機能の有無において違いがあり, allein は, 数量詞で量化された要素を焦点値にとらない。また(1)のように, nur か allein かで意味が異なる例もみられる。

- (1) Nur/Allein der Gedanke daran ist furchtbar.

この際の *allein* は評価的な機能をもつとされる。本発表では、*allein* の評価的機能がいかなる原理で生じるかについて、*nur* の意味機能との比較から例証を試み、*allein* は不定の要素を焦点値にとらないと仮定し、定の表現である複合判断の表出であると主張する。

*allein* は、量化された要素を焦点値にとらないことから、先行研究では「非スケールの」と考えられているが、これは *allein* がスケールの想定における上位の代替を排除しないという機能面での観点であり、*allein* の使用でもスケールの想定自体はなされると考えられる。そして、スケールの *nur* と評価的 *allein* は、焦点値を低い値として評価する点で共通することに言及し、「評価」がスケール上での他の要素（代替値＝前提となる母集合）との比較から生じることに鑑みて、*allein* の評価的機能を再考する。まとめとして、限量的 *allein* が数量や地位、等級を表す語句を焦点値としないことから、評価的 *allein* は、本来的に段階のある対象でない事態にスケールを想定し、焦点値をスケールの下位に等級づけすることで、焦点値の意味に評価的な要素を加えると結論づける。

#### 4. Video, ergo sum — ACI（不定詞付き対格）構文における「主語」をめぐって

藤縄康弘

Kuroda (1972)は Marty (1918) に基づき、日本語の現象文（三尾 1948）ないし存現文（佐治 1972）としてのガ文(1)を複合判断に対する単独判断の表現と位置づけたが、これに対応する表現として、ドイツ語では知覚動詞 *sehen/hören* の下に現れる ACI（不定詞付き対格）構文(2)が特筆される：

(1) (おや、) 雨が降っている/ 男の子が笑っているよ

(2) Ich sehe/höre {es [AKK] regnen/einen Jungen [AKK] lachen}.

この構文における対格の文法的ステータスは、これまでさまざまな文法理論の枠組みで論じられてきたものの、これを不定詞に対する主語と分析しても、*sehen/hören* の目的語と分析しても不満が残る。前者に対する疑念として、不定詞の「主語」の義務性や照応詞束縛に関する特異性が挙げられるし、後者に対しては、ACIの対格が受動化によっても主語にし難いことが指摘される。

このような矛盾は、「文は主語と述語からなる」との伝統的文法観がこの間、根本的に疑われないまま分析がなされてきた結果である。本発表では、知覚動詞下の ACI 構文がその内部・外部いずれの相に鑑みても、Marty (1918) の定義する複合判断・単独判断のうちの後者を意図していること、つまり、

この文はその見かけにもかかわらず主述関係を根底から欠く表現であることを、関連する過去の拙論や新たに得られた経験的データに基づいて明らかにする。

口頭発表：文学Ⅰ（10:00～11:55） B会場（Zoomチャンネル2）

司会：里村和秋・加藤健司

（10:00～10:35）

## 1. スイスのヴィーラントとシェイクスピア

今村武

本発表は、18世紀後半のとりわけ疾風怒濤の詩人によるシェイクスピア崇拝と受容の基盤がヴィーラントに遡ることを確認し、スイス・チューリヒのボードマー邸から開始されたシェイクスピア受容最初期の輪郭を粗描しつつ、以下2つの論点を考察する。

まず、スイス滞在時代のヴィーラントを再考する契機としてのシェイクスピアを指摘する。1752年ヴィーラントはチューリヒに招かれ、ボードマーのもとで初めて英語を習い始め、その後ボードマー邸にエディンバラで出版された『シェイクスピア全集』がもたらされ、ヴィーラントはそれを直接手にすることで、イギリスの劇作家への理解を急速に深める。1740年代以前に開始されていたボードマーによるシェイクスピア紹介が発展的にヴィーラントによって引き継がれた経緯の大枠は言及されるものの、その後の経過を含めた詳細についてはほとんど検討されてこなかった。本発表は、ドイツ語圏のシェイクスピア移入が、アディソンやドライデンら英国の評論家を經由して行われ、ボードマーとヴィーラントのシェイクスピア理解の基本線を形成し、それが以後に大きな影響を与えている点を指摘する。

次に、ヴィーラントが、シェイクスピア作品から最初の翻訳・上演作として『テンペスト』を選択した理由を探りつつ、その過程で着目された作品のストーリーと場面設定の独自性、ヴィーラントの詩的関心との関連性を検討する。

(10:40～11:15)

## 2. パウル・ツェランの翻訳「若きパルク」分析

齋藤由美子

パウル・ツェランは、ポール・ヴァレリーの「若きパルク」（アレクサンドランで書かれた512行の長詩）のドイツ語訳を1960年に公刊している。

詩においては韻を踏むなどの制約からシンタックスがずらされたり、意味的にはつながらない語が音によって結び付けられたりするために、通常と言語を用いているときには思いつかないような思考が可能になるが、詩の翻訳の場合こうした不自由さに加えて、原作による拘束がある。だからこそツェラン訳においては、原詩やツェラン自身の詩とは異なる、詩的効果が生み出され得るのではないだろうか。

「若きパルク」の翻訳はビューヒナー賞受賞の講演録「子午線」とも関連付けられ、数多くのフランス詩のツェランによる翻訳のなかでも、これまでもっとも研究されてきた。しかし、日本においては関口裕昭氏によって言及されているほかは、ほぼ先行研究がない状況である。

欧米の研究では、ツェランがヴァレリーの詩から逸脱している点について、ツェラン自身の詩の言語やツェランの翻訳の詩学全体の発展プロセスと関連付けて論じられたり、ツェランによるヴァレリーの詩の解釈や評価を基に考察されてきたりした。こうした傾向は比較的新しい Ute Harbusch や Florence Pennone の研究にも見出される。

本発表では、上記のような位置付けからは零れ落ちるツェラン訳の特徴を、「身体」に注目して分析することによって明らかにし、その意義を考察する。

口頭発表：文学Ⅱ／文化・社会（10:00～12:35）

C会場（Zoomチャンネル3）

司会：鈴木伸一・松崎裕人

（10:00～10:35）

1. ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとイディッシュ語文学

—言語と文学における「ユダヤ性」へのアンビバレンツ

藤田恭子

第一次大戦後にルーマニア領となったブコヴィナのユダヤ系ドイツ語話者たちは、マイノリティとしてドイツ語文化を守る立場となった。しかも一九三三年秋には同国のドイツ系住民がナチズム受容を表明した。それに対抗するべくユダヤ系詩人たちは、自らを「正統なドイツ文化」の担い手、すなわち人道や寛容、自由といった普遍的諸価値に根差した「ドイツ文化」の担い手として位置づけ、伝統的なモチーフや詩形式を意識的に選択していく。またブコヴィナ出身の A.キットナーや R.アウスレンダーの回想からは、彼らがドイツ語話者として、イディッシュ語に距離を置いていたことを看取できる。

しかし他方で彼らは、イディッシュ語詩人と親密な交流を重ねていた。キットナーは1979年、同郷の著名なイディッシュ語詩人・作家 I.マンゲルの思い出を長文の記事にしたが、そこには両者の深い絆がうかがえる。アウスレンダーにはマンゲルの名を冠した詩や彼の代表作「白パンのバラード」のドイツ語および英語訳がある。A.マルグル=シュペルバーはすでに両次大戦間期に、マンゲルを『チェルノヴィッツ朝刊』文芸欄で紹介した。第二次大戦後も、マンゲルの翻訳や紹介に携わった。

本発表では、従来入手困難であった両次大戦間期や第二次大戦後のルーマニアで刊行された諸資料を踏まえ、ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たちとイディッシュ語文学との関わりを明らかにする。言語的文化的意味での「ドイツ人」であり続けようとしつつ、イディッシュ語文学の認知にも寄与するべく努める彼らの、「ユダヤ性」に対するアンビバレンツを解明する。

(10:40～11:15)

## 2. フランツ・カフカにおける朗読とイディッシュ演劇

山口知廣

フランツ・カフカ（1883～1924）の日記には、創作の転換点である『判決（Das Urteil）』（1912）の執筆直後に妹たちに書きあがった作品を朗読したことが書かれている。20世紀初頭には朗読家という職業が存在し、多くの朗読会が催されていた。カフカは、朗読家や役者、そして友人たちの朗読を聴くだけではなく、自分でも朗読を行っていた。日記や手紙からは、カフカが朗読について大きな関心を寄せていることが確認できるだけでなく、彼の執筆に何らかの関係がある可能性もうかがえる。しかし、近年になるまで、カフカにおける朗読の重要性はあまり大きな注目を集めなかった。（Gellen 2011）そこで本発表では、朗読についてカフカが最も多くの記述を残した1911～1912年の日記と手紙を主な研究対象として、同時期にカフカが関心を寄せていたイディッシュ演劇についての文章と比較し、その独自性を明らかにしたのちに、カフカと朗読についての概観を描くことを試みる。カフカの日記の朗読についての文章とイディッシュ演劇についての文章からは、台本と役者、テキストと朗読家との関係、そして観客と役者、聴衆と朗読家との関係について共通した観点が確認できる。一方で、イディッシュ演劇では常に観客であったカフカは、朗読においては聴衆としてだけではなく、時には朗読する側に立つこともあった。これらの違いを丁寧に整理し、カフカの自作朗読についての記述を通して、カフカの執筆と朗読との関係も考察する。

(11:20～11:55)

## 3. シネアストとしてのヨーゼフ・ロート — 『聖なる酔っぱらいの伝説』の映画シーンを手がかりに

依田哲朗

ロートの遺作『聖なる酔っぱらいの伝説』（1939）の先行研究では、主に作家の伝記と作品の対応関係を読み取ることに、解釈の重点が置かれてきた（Bronsen 1974）。また、在りし日の帝国を美化する「ハプスブルク神話」（Magris 1966）の作家としてロートを位置づける研究史のカノンは、ロートの「故郷喪失」、ひいてはナチス台頭にもなう「自己崩壊」の悲劇的側面を強調して、本作を作家が願い求めた「幸福なユートピア」の解釈圏へ引き込んだのだ（今橋 1998）。

本発表では『聖なる酔っぱらいの伝説』に三回も登場する映画館の場面と、ロートの映画批評を分析することで、「昨日の世界へ回帰する」、「反進歩主義者」としての作家のイメージに修正をはかりたい。ロートはエッセイ『反キリスト』(1934)の中で、ハリウッドを激しく非難したことから、「映画嫌いの作家」とみなされてきたが、彼の書いた映画評を渉猟すると、そこには「映画に対する肯定的な言説」も見つかるのだ。

ロートは「芸術の新たな可能性には無頓着な、コンサバティブな古典作家だ」(Reich-Ranicki 1994)と揶揄されもした。しかし『聖なる酔っぱらいの伝説』では、「大衆映画の類型的人物造形」(Kracauer 1927)をはじめとした、映画エレメントを文学へ適応する試みがなされている。それらの意図が解明される時、本作はユートピア、及び伝統的な聖人伝の枠組みを外れ、新たな解釈路線へ導かれるであろう。

(12:00~12:35)

#### **4. Stil – ein Brückenkonzept zwischen hermeneutischen und wissenssoziologischen Traditionen?**

**Dr. Tobias Schickhaus (Kyoto)**

Was bleibt von Interpretationen, sobald die Geschichte ihr Recht fordert? Dieser wissenschaftshistorische Beitrag geht der Frage nach, inwieweit dem Stil-Begriff eine interdisziplinäre Schlüsselfunktion zwischen ausgewählten hermeneutischen und wissenssoziologischen Theorien zugesprochen werden kann. Erörterungen werden vorgestellt von Johann Martin Chladenius (1969 [1742]), Friedrich D. E. Schleiermacher (1977 [1838]), aber auch von Karl Mannheim (1980 [1921-25]), Ludwik Fleck (1980 [1935]) und Hans-Georg Gadamer (1986). Diese diachrone Quellenauswahl möchte einen Beitrag leisten zum umfangreichen »Stil«-Eintrag von Wolfgang G. Müller (1998).

Chladenius, Johann Martin: Einleitung zur richtigen Auslegung vernünftiger Reden und Schriften. Düsseldorf 1969 [1742].

Fleck, Ludwik: Entstehung und Entwicklung einer wissenschaftlichen Tatsache, hg.v. Lothar Schäfer und Thomas Schnelle. Frankfurt a.M. 1980 [1935].

Gadamer, Hans-Georg: Hermeneutik I. Wahrheit und Methode. 5. Auflage. Tübingen 1986.

- Mannheim, Karl: »Über die Eigenart kultursoziologischer Erkenntnis«, in: Strukturen des Denkens (1980 [1921-25]), hg. v. David Kettler, Volker Meja und Nico Stehr. Frankfurt a. M.
- Müller, Wolfgang. G.: »Stil« In: Historisches Wörterbuch für Philosophie, 10. Bd., hg. v. Joachim Ritter, Karlfried Gründer und Gottfried Gabriel. Basel 1998, S. 150–159.
- Schleiermacher, Friedrich: Hermeneutik und Kritik. Mit einem Anhang sprachphilosophischer Texte Schleiermachers (1977 [1838]), hg. v. Manfred Frank. Frankfurt a. M.
- Szondi, Peter: Einführung in die literarische Hermeneutik. Frankfurt a.M. (2001 [1975]).